

一 留 学 生 の 報 告

井 上 猛*

御存知の方も多いことと思うが、フランス政府は毎年数十名の日本人給費留学生を募集している。試験は書類による選考を受けた後に、日仏混合の10人ばかりからなる試験官との面接の形で一次二次と2回に渡って行なわれる。自然科学系の学生に対しては、会話を初めとするフランス語の知識がそれほどなくても構わない、とは良く聞くことである。しかし、それは飽くまでも試験に際してのことであって、彼地で困ったり不自由を感じたりするのは結局本人以外の何者でもないのであるから、日本を発つ前に十分な知識を身につけておくのに越したことはない。一流の研究者として招聘されるのならいざ知らず、私が経たような手順で渡仏すると単なる一学生でしかないから、いろいろと困難にぶつかることも少なくはないであろう。外国人のちっとも珍しくないパリなどでは、良い意味でも悪い意味でも私達を外国人として特別に扱ってくれるようなことはまずない。

私は初め一年間の予定で出かけたのであるが、講義を聴いてもゼミナール等の場で議論をしても、知っている事柄は良くわかるけれども、良く知らないことや新しいことになるとさっぱりわからなくなってしまおうということに気がつき、何とか意義ある留学生活を送りたいものと1年間の延長を願い出た。

出発前に、パリのアンリ・ポアンカレ研究所 (Institut Henri Poincaré) に配属されたという通知を受け取っていたので、着くと直ぐにピエール・キュリー通り (Rue Pierre Curie, その後「ピエール・マリー・キュリー通り」と改名された) にある赤煉瓦の建物を訪れた。この一画にはいろいろな研究所があって、キュリー夫人が活躍したラジウム研究所もここにある。さて、ポアンカレ研究所の中に入ってみると、カルタン(H. Cartan)とかシュヴァレイ (C. Chevalley) とかの世界的な数学者の名前が散見する。ところが、私が指導を受けたいと思っていたジャン教授(M. Janet)は、久しい昔に退官しておられて研究室にはほとんど出てはこられないということであった。仕方がないので、面会を依頼する便りを書いて、ある水曜日の午後、当研究所で毎週行なわれている気楽なお茶の会の席で会って貰った。見るからに好々爺といった感じで小柄な教授は『80才の今は、自宅でゆっくりと研究生活を楽しんでいます』とか、『私の直前の力学科の主任はシャズイ (J. Chazy) だったんですよ』などと、目を細めながら話して下さった。兼ね兼ね三体

問題の勉強をしたいと思っていたので、この分ではいろいろなこと尋ねるぞと内心大いに意気込んでいたのがあるが、『私自身、三体問題の研究はほとんどやったことがありませんし、私の後を引き継いだショッケン・ブリュア夫人 (Y. Choquet-Bruhat) も、専門は相対性理論です。他にもこれといって三体問題の研究をやっている人は見当たりませんね』と、気の毒そうにいわれた。それではというので、研究所の図書館に通ったり、論文を複写してそれを大学都市 (Cité Universitaire) の自室で読んだりということから始めた。ドンフェール・ロシュロー (Denfert-Rochereau) にある天体物理学研究所 (Institut d'Astrophysique) では、ティリイ教授 (Y. Thiry) と、コヴァレフスキー教授 (J. Kovalevsky) の天体力学の講義を受け、さらにフランス学士院 (Institut de France) の近くにある経度局 (Bureau des Longitudes) およびセース河の岸にある理学部では、ゼミナール等に参加した。講義は日本の修士課程に相当する学生を対象にしたものであったが、私の取ったノートは日本語が大部分を占めているような状態である。ゼミナールの折には、私の研究していることも幾度か発表する機会を得た。経度局での時には、主宰のコヴァレフスキー氏から、研究の内容についてもさることながら、その都度私のフランス語が少しずつ増しになってきたなどと批評された。

日常的な生活に関しては、パリのオルリー空港 (Orly) に着いたその時から、別にこれといった不自由を感じたこともなかったが、相手の話を完全に聴き取り、理解するのは、まだまだ困難があったので、最初の4カ月間アリアンス・フランセーズ (Alliance Française) という外国人向けのフランス語の学校に通った。ここでは、先のジャンネ氏の姪のジャンネ嬢 (Mademoiselle Janet) に3カ月間教わった。「お嬢さん」といっても、60才前後と思われるオールド・ミス (vieille fille) であった。

ところで1968年の初夏には、いわゆる5月危機がフランス全土を襲い、不安定な日が3週間も続いた。一切の公共の交通機関は止まり、銀行や郵便局もストライキに突入していたので預金も引き出せなければ手紙のやりとりもできなくなってしまった。大学も閉鎖されて、実質上は夏の休暇に入ったような形となった。私達は、いわば大学都市に軟禁されたようなもので、来る日も来る日も、やれド・ゴール政権がどうのこうのと、大学改革がどうのこうのとといった議論を至る所で耳にした。しかしながら、事態は次第に収拾の方向に向かい、7月14日

* 京都産業大学理学部

(Quatorze Juillet: パリ祭)には、ド・ゴール將軍 (Général de Gaulle) を初めとする、軍人やさまざまな戦車や兵器が、シャン・ゼリゼ (Champs-Élysées) を例年通りに華やかに行進するまでになった。

私はこの直後にイギリスに飛び、ロンドンおよびケンブリッジを駆足で見物してニース (Nice) に向かった。それは、経度局の面々が天体力学の勉強会を東ピレネー (Pyrénées Orientales) 山麓で開くことを計画しており、私もそれに参加することにしていたからである。何となくうとうしかなかったロンドンに比べて、ここはまた、汗ばむほどの暑さを感じさせながらも、何と清々しいことであろう。勉強会の始まる日も迫っていたので、起伏の多いニースの街を散歩しただけで紺碧海岸 (Côte d'Azur) で海水浴を楽しむこともなく寝台列車に乗り込んだ。翌朝はスペインにも近いペルピニョン (Perpignan) で軽便鉄道のようなものに乗換え、ブラド (Prades) に着いたのは7時過ぎであった。ここで、パリからの経度局の一行と合流し車で目的地に向かった。途中、温泉療養で知られているモッセ (Mosset) という小さな町を通り過ぎ、着いた処は奥深い山の中であった。そこには幾棟かの建物があって、二組の夫婦が外国人の子供を対象に経営している、一種の小学校があった。ここではフランス語の全くわからない子供でも3、4カ月もすれば、ほとんど不自由を感じなくなるという。しかし、子供とはいいいながらも、すでにしてそれぞれの母国語に応じて特有の訛を持っていた。たとえば、スペインの子供達にはbとvの発音の区別がわれわれ同様に難しく、またoiseau (オワゾー: 鳥) がオワソーとしか発音できなかつたりする。といった類である。とにかく、この一見山小屋風の小学校に総勢20人ばかりのフランス、イギリス、レバノン、ブラジルそれに日本の大人が8日間の合宿をしたわけである。その年のテーマは「天体力学における永年摂動」で、おのおの勉強してきたことを発表し合った。ここでの生活は、8時半から朝食、9時から正午までは午前の部、後はゆっくりと昼食をとって3時から5時までが午後の

部、それが済むと散歩や山歩き、そうして夕方7時頃から、10時、11時頃までが夕食時間といったものであった。勉強会の途中では30分ばかり休むのであるが、その時には一斉に席を離れて戸外に出、高原の陽を浴びながら雑談をするのである。誰一人として居残っている者などはなく、絵葉書一枚を書くために机に向かうのさえも気が引けるほどであった。

ここに来てから5日目の夕方には、昨年勉強会の時に撮ったスライドや、その年の5月に東京で開かれたCOSPARの会議に出席したコヴァレフスキー、バルリエ (F. Barlier) 両氏が持ち帰ったスライドを投影して楽しんだ。その夜夕食が始まったのは11時であった。その上、翌日は朝早くから近くの2,500m級の山に登るといのに裕々としたもので、夕食が終わった頃には、午前2時を疾うに過ぎていた。さて休もうと床についてまどろむ間もない中に、何やらまわりが騒がしくなってきた。事の発端は毛布の奪い合いらしいのであるが、関係のない連中までが起き出してきて、まるで蜂の巣をつついたように騒ぎは大きくなった。私はその日は疲れていた上に、暗闇で溝に足を踏み入れてひどく捻挫していたので床の中で眠ろうと努めていた。騒ぎの方は一向に治まる気配を見せないばかりか、逆に『今からゼミをやれ』、『そうだそうだ』、『コヴァ (コヴァレフスキー氏のこと) を呼べ』、『寝ているのは誰だ』、『イノウエだ』、『それ奴を起こせ』と、私の処へやってきて懐中電灯で顔を照したり毛布をはがしたり痛む足を引っぱったりするに至った。そうして『ゼミに出ろ』というので『疲れているんだ、放っといてくれ』といって毛布を被った。彼等は私一人を残してゼミを始めたが、実に午前4時のことであった。

いろいろなことがあったが、この山麓での一週間は本当に楽しいものであった。

帰国後の今は、世界中に散らばった友人と手紙のやりとりをして、共に過ごした日々を懐しんだり、再会を夢見合ったりしているところである。

《投稿欄》

惑星の扁率の表現について

私は上記タイトルに関して研究をつづけてきた結果、

惑星の扁率について下記のことをらみつけましたのでご報告します。

(イ) 観測等による既知のデータの表示

(理科年表S44年度)

	地球型惑星		大型惑星			対恒星周期
	地球	火星	木星	土星	天王星	
自転周期	0.9973	1.0260	0.4101	0.4264	0.451	
比重	5.52	4.0	1.33	0.68	1.7	水=1
赤道重力	1.00	0.38	2.43	0.97	0.90	地球=1
扁率	0.0034	0.0052	0.062	0.096	0.06	